

物言〈ものい〉い地藏〈じぞう〉（三田市・日出坂）

むかし、但馬〈たじま〉の僧が日出坂峠にさしかかった時、大雨に降られ峠のお堂で雨宿〈あまやど〉りをしていました。僧は、旅のつかれと、雨宿りができて、やれやれと思いをゆるめているうちに、とうとうねてしまいました。どれぐらいねむったかわかりません。「おい、どうだっ。」

「うん、生まれた寿命〈じゅみょう〉は十七、蟲〈あぶ〉に手斧〈ちょうな〉。」と、いう声がどこからともなく聞えてきました。僧は、びっくりしてとび起きました。だが、堂の中には誰もいません。ただ少し、地藏様がわずかに動いたように思えました。もう、外は雨も上がっていました。僧は、こわくなり地藏様にお礼をいうなり、そそくさと出ていきました。

それから、十数年後、僧は再びこの日出坂へやって来ました。すると、里では大勢の人びとが集まって、ガヤガヤさわいだり、鼻をつまらせたり泣いたりしている人もありました。不思議に思った僧は、

「一体何事があったのか。」と、そのわけを聞きました。

すると、村の老人が、こう話しました。

「今年十七になる大工の弟子が、せっせと仕事をしていると、そこへ数匹の蟲〈あぶ〉がやってきて、若者のまわりをとびまわり、いくら手で追っても追ってもなかなか逃げない。あまりうるさいので、持っていた手斧で追い払っているうちに、手もとをくるわせ、するどい手斧の刃〈は〉を自分の頭に受け、かわいそうに死んでしまった。」

これを聞いた僧は、以前〈いぜん〉に雨宿りをして聞いたあのことは、きっと地藏様の予言〈よげん〉だったのにちがいないと、思いました。

「こんなに元気な若者が蟲に命を落すなんてあんまりだ。」と、若者の死を心からいたみ、ねんごろにお経〈きょう〉をささげとむらいました。そして、峠へ足をはこび地藏様に前の雨宿りのお礼をのべ、供養〈くよう〉のお経をとなえ立ちさりました。それから村人はこの地藏を、物言い地藏と呼ぶようになりました。今その地藏様は峠から移され、西山の桜の林の所にまつられています。

